

小説 千夜詠

挿絵 saxasa



変態女子寮
HENTAI JOSHI RYŪ
おぼろけおぼろけ

立ち読み版

一 かくして俺は寮長になった

006

二 どうしてか俺はパパになった

027

三 寮長の俺を見た

069

四 そして俺は決意した

096

五 彼女の性癖を心配して俺は動く

123

六 彼女の寂しさを俺は知った

168

七 やっぱり俺がどうにかしないと

191

エピソード

254

登場人物紹介

Characters



あかばねこうや 赤羽洗也

平凡な学生少年。なんだかんだ言っても面倒見のよい性格で、悪く言うと頼まれると嫌と言えない男子。



よののあ 与野乃彩

気が強く攻撃的な性格の下級生。運動神経抜群で、運動部の助っ人として活躍している。欲求が募るとんでもない行動に出る癖がある。



ひがしじゅうしようあや 東十条彩

クールで格好いい人と男女から憧れの視線を向けられている生徒会長。普段の振る舞いからは想像もつかないある願望を抱いているようだが……？



かみなかざとみこと 上中里美琴

洗也のクラスの委員長で幼馴染み。生真面目で一見地味だが、かなりの巨乳のけしからん体つき。何かと洗也のおせっかいを焼いてくれる。

「ねえ、パパあ……、おしゃぶり、欲しい……」

「えっ、ああ、えっと、確か、その辺に……」

彩たんは、首を横に振る。

「パパの指がいいでちゅ。ちようだい」

「は……？ い、いや、俺の指なんて汚いぞ。……これが、いいの？」

潤んだ瞳で頷かれ、戸惑いながら手を彼女の顔に近づけていった。

人差し指を伸ばし、ぷつくりとした艶めく唇に寄せていく。瞳を細めた彩が口を開き、合間に唾液に濡れた赤い舌が見えた。ねちゃつと少し唾の糸が引いていて、物欲しそうにも見える表情が淫靡に思えた。

ぬちゅ……つ、と柔らかな唇に指先が挟まれ、さっそく唾液に濡らされる。

（うわあ、温かい……。舌が……触って……）

ちゅっ、ぺちよぺちよ……。窄められた唇が吸い付いて、舌先が爪を舐めてきた。

第一関節までを蠢く舌が回転して、心地よさがそこから湧いてくる。うつとりしたような顔つきで少年の指をしゃぶりながら、少女は、切ないような瞳で、こちらを見つめてきた。性的な戯れを強烈に連想させられ、興奮状態に追いやられてしまう。ズボンが極端に窮屈になって、違和感が増していった。

（エ、エロいです、会長……。こんなこと、してたら……）

ちゅう、くちゅくちゅ……。指をちよつと抜き差ししてみると、

「んっ……、んんっ、おいちい……」

甘ったるい声が漏れて、洗也は逆上のほせてしまった。

無防備な姿の彩は、時折四肢を揺らし、指を深く差し込むごとに瞳の潤みが増していく。くちやくちやくと口内の粘膜を穿るようになると、少女は頬を桜色に染めながら、舌をくねくねと絡みつかせてきた。

指おしゃぶりに満足したのか、唇の締め付けがなくなったタイミングで、洗也は手を引いていった。糸が引かれながら、涎掛けに唾液が落ちていく。

彼女の唾にねっとり湿らされた指が、いやらしい光沢色になっていた。

「じゃ、じゃあ、次はどうしようか、彩た……ん？」

少し困ったような表情で、じつとこちらを見つめてくる会長。むずがるように腰が僅かに震わされる。

「どうしよう……、そんなことまでしたら、きつと……変……思われちゃう」

聞かれていないつもりの中の心が漏れているようだった。表情の赤みが増しながら、羞恥と悦が入り混じっているように見える。

「で、でも……あ、赤ちゃん……なんだもん。しても、いい……よね。ん……っ」

ベビー彩は、瞳を閉じた。一瞬、眉根を寄せて、ブルツと身体が震える。途端、恍惚とした表情を見せてきた。

「はあ……」

色香が濃厚な吐息が発せられる。

それから少しだけ間を置いて、赤くなつた彩の顔が向けられた。

「あ、あのね……、彩たん……おしっこしちゃつた……」

じつと絶たまるような視線が突き刺さってくる。

「はい……？」

ちよつと待つてくださいい会長。もしかして、それはフリですか。いくらなんでもハードルが高すぎます。いや、いくらなんでも、乙女が性欲真つ盛りの少年にそんなことをさせるはずがない。東十条彩は、学園でも有数の人格者だ。

「気持ち悪いでちゅ。オムツ……替えて」
やっぱりですか！

クールで格好いい生徒会長は、この空間にはもはや存在しないのだった。

「ほ、本当に、して、いいんですか？」

「早くうつ、気持ち悪いんでちゅ」

ぷくつと可愛く頬を膨らまされても、勇気がいる。

完璧な変態行為。遠慮と、もしかしたら本当にしたら嫌われてしまうのではないかという不安。反して、猛烈な興味と加速する興奮、そして劣情が拒絶しきれない優柔不断を生んでいた。

決断しあぐねていると、彩の表情が見えた。真つ赤になつている。微かに震えてもいる

ようだった。間違ひなく強い羞恥を感じているのだ。それでもこんなお願いを口にしなければならぬほど、彼女の体はその性癖に弄ばれている。知ってしまった男の責任があった。

「よ、よし、じゃあ、オムツを替えましようね、彩たん」

震える指先で、まずオムツカバーを外す。年上の赤ん坊は自らも腰を浮かせてくれて、さっとそれを取り除くことができた。

オムツの本体はしつとりと濡れていた。布製のそれから、ムンつと湯気が立ち上ってくるように、確かにアンモニアの臭いがしてくる。

どこか泣きそうな顔をして、彩はこちらの様子を窺っていた。膝を折って股間を開いた状態で、そこにはもう布きれだけが乗せられている。少し脇に漏れてしまったのか、股内が濡れていた。

ゴクツと唾を飲み込んで、再び指先を黒髪の少女の下腹部に寄せる。

全身から牝が匂い立つような肉体をした赤ちゃんの表情が、興奮のそれに変わった。

「っ……はあ、はあ……、パ、パパあ……、は、早くう……う」

温かく湿った白い布に、両手の指先を添える。

これを捲れば、憧れ続けた美麗の女性の秘部が露になるのだ。

初めて目撃する直前、興奮は最高潮を迎え、乱れる呼吸を抑えつけるのに躍起になる。

(ハア、ハア……、会長の……オマ○コ……)

大量の小水を吸って重い布を、暴発しそうに鼓動を高鳴らせ、ゆっくりと捲りあげていった。更に熱い湿気が、もわんと昇ってくる。蒸らされた肌と粘膜、そして粗相そそうの香りが、それが美少女のものという意識に変換されて、淫靡に鼻腔を刺激してきた。

「凄い……」

つい、咬いてしまう。

彩の股間の周囲が全ておしっこに濡れていた。漆黒の縮れた恥毛も全部濡れていて、土手肉から内の粘膜に張り付いている。大きく広げられ、ぱっくりと開いたワレメの内側によりジメジメしたサーモンピンクの粘膜が見えた。美しく光沢しながら、心地よさそうな微肉の弾力を視覚に訴えてくる。そこから上部にある真珠色の突起がまた発情したように芽を膨らませ、強烈にそそつてきた。丸みあるお尻の二つの膨らみの合間に覗けるアナル。恥ずかしのすぎる排泄の外門は、きゅつと窄んでいて、芽吹きだした蕾のように愛らしい。

「パ、パパ……、見てないで、拭いて欲しいでちゅ」

羞恥にむずがるように、彩はお尻を横にくねらせ揺らせた。

歡喜と興奮に身を委ね、しばし見入っていた洗也は、ようやく我に返ったように近くにあった赤ちゃん用お尻拭きを手に取った。

「き、きれいな、きれいな、しようね、彩たん……」

むちむちしたお尻を少し持ち上げるようにすると、柔肉に指先が僅かに沈み込む。手に平に吸い付くような感触で、もう片方の手で、撫で回すように拭いていく。

(会長の……お尻……、俺、触ってる。はあ、はあ……、ズボンがはち切れそう)

腰を浮かせた状態で、大開脚された剥き出しの女陰が真正面に無防備に晒されていた。そんな卑猥なワレメをした大きな赤ちゃんは、拭いてもらえるのが気持ちいいのか、それともお尻の感覚がいいのか、瞳を瞑りながら、心地よさそうな表情をしている。

「あうんっ……、パパっ、拭き方、なんか、エッチでちゅ」

「え……っ、そ、そんなこと、ないぞ……、は、はは……」

拒んだり、嫌がっているそぶりではない。

だが、釘を刺された気がして、お尻はそれくらいにしておいた。汚れたオムツを抜き取った後、洸也は躊躇ためらって思案したが、

「んんっ、お股、拭いてくれないと、痒くなっちゃうでちゅ」

と、にわかには信じがたい許しがたので、もう欲求に準じて、いよいよ女の子の芯に手を伸ばした。自分では制御できない震えが指先に生じる。

太股もやはり柔らかく、肌はどこも弾力のある押し返しが手の平に伝った。

素材越しにくる股間の熱気に、生々しい牝粘膜の香り。おずおずと蒸れた恥毛を撫でていく。

(うわあ、本当に、拭いちゃってるよ、お、俺……。も、もつと、奥の方まで……、いいのかな)

まだ乾かず濡れたままのワレメ。食み出している肉ビラが、溶けだしたような色になっ

てふやけているかのようだ。

そつと、繊細そうな微肉を拭い始める。すると、

「ひゃんっ！　パ、パ、パ……、優しくう……」

「あ、ああ、すみません」

本当は力の入れ具合が分からず、遠慮がちに触れていくだけだった。それでも、牝の花弁は、抵抗少なくプルンと震えていく。小水とは別の、もつとスケベでぬちゃぬちゃした液体に塗られていたように。

(こ、これ……っ、会長、まさか、感じて……)

意識した途端、ゾクゾクと興奮にもう一つ上乘せされて、ちよつとした嗜虐的な気分になさえ陥りそうになってしまう。

(い、いかん……、あくまでも、パパとして……)

ここまででも洗也にとつては十分すぎる刺激だった。硬直しきった肉棒がズボンの中で切なく唸りをあげている。

「ん……っ、はあ……」

ぬちゅつと土手唇と粘膜唇の合間に指が入り込むと、ベビーキャラを忘れて彩は牝の呻きを漏らした。ピクンつと上体が躍り、前掛けの下のたぶんとした膨らみが甘いデザートのように揺れる。

衝動が猛烈に湧き起こった。いけないと思いつつも、今直ぐ自分のいきり立って疼き



まわる肉棒を扱いて、すつきりさせたくなくなってしまったのだ。

ふきんを彼女の股間から離すと、ねとつと粘液の糸が引かれた。

「じゃ、じゃあ、新しいオムツをしようね、彩たん」

名残惜しそうに女陰を再び布に包んでいった。

（よ、よし、後は、何か理由をつけて、この部屋から……。トイレってことにするか）
なんとなく怪しまれているような視線を感じる。

「パパ……。変なこと、しようと思っていまちえんか？」

「そ、そ、そ、そんなわけないぞお」

何かを察したように口角を上げる彩。その直後、彼女は仰向けから、四つん這いになってハイハイしながら寄ってくる。そして「ダー」と片手を伸ばすと、洗也の股間にタッチした。

「な……。っ、ちょ、ちよつと……」

その瞬間、赤ちゃんぽく振舞っていた彼女の表情が妖艶な女のそれに変わっていた。

「パパの……。っ、チ、チンポおしやぶり、とつても張つて痛そうでつちゅ……。彩たんが……。ちゅーちゅーして、ミルクを吸い出してあげまぢゅ」

羞恥に細められる彩の瞳。正義感が強く真面目な憧れの彼女の唇から発せられた男性器を表す言葉に、衝撃と興奮を覚えないわけにはいかない。

指先から手の平で絶妙な優しさで摩さすられる。痛みが引いていくように悦楽が湧いて、興

奮しきった恥ずかしい状態を確認されても逃げ出すことはできなくなった。

「チューチューって……」

そこまで期待していなかった戸惑いに動けない。

「パパにお股拭いてもらってたら、お、お腹、空いちやった……」

「い、いや、でも……」

切なく求めるような表情の彼女もまた自身に染み込んだ羞恥に全身を火照らせ、欲求を抑えられないでいた。

「本当に、欲しい……。だから……パパのミルクちようだい」

先程自分の指を舐め回した唇が腫に飛び込んできた。柔らかな締め付けと口内の温かさ、独立した生き物のように蠢いた舌の擦ったくも性的な刺激に満ちた感触を思い出してしまふ。我慢なんてできない。

「わ、分かったよ。……ほ、ほら……」

ベルトを外し、ファスナーを下ろした。既に先走った淫水で染みのついた下着から、興奮の勢いのまま肉棒を取り出す。

「ひゃんっ！ こ、これが、パパの……」

刹那、驚いて開かれた彩の瞳が、次にはぐつと細められる。片思いで憧れる王子様を見つめるような表情になった。

天を向いてそそり勃った肉の強張りは、毒々しく血管を浮き上がらせ、膨らみきった赤

い亀頭はカリ高く傘を広げている。大人びた顔立ちの少女の鼻先で、僅かに脈動して、先端は漏れ出ていくカウパーに濡れていた。牝の膣が戦慄わななくような大きさと凶悪な風貌が、学園のクールな美人生徒会長の呼吸を切なく乱れさせる。

（うわあ、恥ずかしい……。けど、会長が、こんなに熱く、見てくれていると……）

ベッドの格子から少し身を乗り出すようにした彩が、両手でそっと握り締めてきた。「おっきい……。それに、とつても熱いでちゅ」

優しい手の平に包まれて、一度ピクツと肉棒が跳ねた。先走りの淫水は、大量受注で生産工場フル稼働の状態で、どつとまた鈴口から漏れて繊細そうな指に垂れていく。

（おおつ、会長の手が俺のを握って……。き、気持ちいい……）

ついこの間までは、指と指が触れただけで感動していたのに。夢見心地になって、はあ、と熱く息を吐いた。

止め処なくなってきたカウパーの漏水で、彩の両手の指が濡れていく。くちゅつ、と音が響き、それを肉棒全体に塗り込むように彼女の両手が上下した。

「ふあつ！ いいつ、会長……」

悪戯に微笑む彩。

「んもうっ、彩たんでちゅよ。パパのチンポおしゃぶり、ピクピクしてまちゅ」

ぬちゅつ、くちゅくちゅ……。滑る手の平が敏感なカリを震わせながら通り過ぎる。亀頭全体を優しく握られると、今度は下がって、軽い圧迫が粘膜の傘を覆った。それを繰

り返されると、腰が跳ねそうになる。

玩具を与えられた年上の赤ちゃんは、高揚とした顔色で、嬉しそうに弄んだ。

欲求に誘う直前の、ただ快楽を与える為だけの淫靡な遊び。力加減と速さは、計算されたように絶妙だ。

「お、おいたが過ぎるよ、彩たん……」

「だってえ、パパのこれっ、おもしろいんだもん」

そう言った彩であったが、肉棒はぐいっと引き寄せられるように角度を変えさせられ、瞳を細めた彼女の唇が近づいていく。

先に舌が伸ばされ、唾液がペロの先端から、垂れていった。涎掛けが湿る。

べちよ……っ！ 生温かい感触が鈴口に走った。

(か、会長が俺の、こんな汚いものを舐めて……)

鋭い性感から、染み込むような心地よさに変わる。美しい女性の舌先が少年の膨らみきった局所を回転して、ぬちゃぬちゃと撫で回し、淫水が彼女の口内に入っていた。

吹き出しを抑えるように、肉棒の根元の方がきつく握り締められて、それもまた快楽になる。

亀頭全体を舐め回す赤い舌ペロは、二度、三度と回転を繰り返した。

「あ、彩たん……き、気持ちいいよ」

一旦、顔を離れた彼女の唇と肉棒の先端に、唾液の糸が引かれ、重力に従って切れる。

夜の公園で仰向けに倒れた乃愛は、雨に打たれたまま咽むせび泣いているようにも見える。

「乃愛……」

濡れた靴音を立てて一歩近づこうとした。

「来ないで！」

「……じゃあ、そういうことで」

と踵かかとを返すと、

「や、やだ、行かないで……」

我が儘を言う子供のような顔がこちらを見ていた。

「どっちなんだよ。うっ……」

切なそうに潤ませた瞳に、頬は桜色に染まっている。

元々放っておくつもりなどないのだ。ゆっくりと近づき、手を伸ばす。立ち上がらせて、引いてやった。

とりあえず橋の高架下まで移動した。

二人とも強まった雨脚で全身ぐっしよりと濡れてしまって、雨宿りの意味はなかったが、少しでも落ち着いて話せる場所が良かった。夏の暑さと、深夜に二人きりといった状況で、冷たさは感じない。

何から聞き出すべきかを思索する。

コートを羽織った美少女を隣に座らせて、まともに顔が見られないのは、彼女の部屋で

見た写真のせいであろう。自分の記憶にない、仲睦まじいという言葉がぴったりの、二人が寄り添った写真。

(聞く……べきか？ いったい、俺たち……、うおっ！)

第一にその疑問を考えていたはずなのに、体操座りをした隣の少女の姿に吹っ飛んだ。

濡れた髪がやけに色っぽく、ボタンもかけずに羽織ったままのコートの隙間から、真っ白く浮き上がる素肌。微かに覗ける胸の膨らんでいく曲線。可愛らしい臍があつて、そこから下の方へは、興味と劣情が沈也の紳士とせめぎ合う。

(な、中に……何も、着ていない！)

ドクンドクンと激しく鼓動が鳴った。この季節に不釣り合いなコートという格好から、彼女が何をしていたか理解しかかつてはいるものの、性的興味と理性がぶつかり合つて思考が結論にまで導かれない。

しばらく二人とも黙り込んでいたが、

「あ、あのね、見つかつちやつたから、告白する。色々、もう……抑えられないから」
そう言うとな愛は立ち上がり、同時にコートの前が開かれる。

「ぬがつ！ お、おい……」

前を開いて裸体を披露する金髪少女。両手を頭の後ろに組んで、僅かに両脚を広げて立つ。スレンダーな体つきであっても痩せぎすな感じはしない。肢体は丸みで構成されていて、とても柔らかかそうに見えた。

乳房は形良く、小ぶりだがそれだけにツンと勃った乳首が目立っている。十二分に牝として発情しているようなそれは、円錐状に痼こっていた。

腰回りは細く、そこから臀部に向けて女性らしい膨らみを描いている。以前にも水着の食い込んだお尻を見せられているが、その果実は甘く美味しそうだ。

そして闇の中にもくつきりと股間のワレメが浮かび上がっている。雨に濡れた薄い繊毛越しに、深く切れ込んだような筋が見えた。つい凝視してしまうと、肉裂上部に挟まれた肉芽とそれに到るラインがあつて、クリトリスはしっかりと包皮から芽を突き出している。体つきに似合わず、少し大きめであつた。

「も、もつとよく見て……、私……、こんな、女の子なの……」

真っ赤になりながら、肉体を震わせ、それでも全身を解放させたままの乃愛。

雨に濡れたままの肢体。美しさと卑猥さのコントラストに洗也は再び見蕩れた。

「こ、こんな……って……?」

熱にうかされているような瞳で金髪の後輩少女は見つめてくる。

「は、はあ……、す、好き……なの……。私、恥ずかしい姿を見られるのが、こ、こんなに、好きなのおっ!」

興奮しながら呆然としてしまう。

「えっと……、変態さん?」

「ううっ……言わないでよ。アンタのせいなんだからっ!」

「はあ？ お、俺？」

震える唇を乃愛は少し噛み締めるようにした。

「そ、それは……、と、とにかく、アンタの視線を意識して、ずっと、わざと裸を見られるようにしたり、水着のことだつて……。あの時、アンタが私の股間をじっと見てるって思ったら……イ、イキそうになっちゃつて……」

「……はあ？ じゃあ、何か、水泳大会の時、お前は泳ぎながら、変態行為を楽しんで、感じてたつて……。お、俺がどれだけ心配したと思つて……」

見られて興奮しながら、それでいて切なそうな表情をしている乃愛。

「うん、嬉しかった……。アンタに抱っこされて、もうこのまま死んでもいいつて、思えるくらい幸せだった」

今にも泣き出しそうな瞳だった。

「ちょ、ちよつと待て……。それつて……。ええ!? だつてお前、いつもツンツンして」「お願い！ 今は見て……。私だけを見て……。失った時間の分だけ……」

立ったまま更に股間を開き、金髪の少女は下品な蟹股の格好になる。こちらにもつと見せつけるように腰を少し前に出すようにして、彼女の呼吸音はつきりと聞こえるようになった。

「はあ、はあ、私は、見られちゃうかもしれないスリルが大好きで、恥ずかしい姿を晒して感じちゃう露出狂の変態なの。でも、本当に見せたいのは、ア、アンタだけなんだから

……。だから、もつと近くで、よく見て……」

もはや性のいやらしい興味が抑えられなくなって、洸也は後輩少女の股間に顔を近づけてしまう。彼女の肉体から垂れた露が鼻先に落ちて、彼の唇に到達した。そのまま口に飲み込む。

「こ、これが乃愛のワレメ……」

ぶるつと少女の体が震えた。

「う、うん、そうだよ……。変態露出少女の、オ、オマ○コ……。ああ、見られてる場所が、あ、熱いよ……」

確かに股内側に熱気が籠っていて、蒸されたような甘酸っぱい秘粘膜の香りが降りてくる。視覚と嗅覚で金髪美少女の牝を愉しむ。意識せず興奮は高まっていき、こちらの息を敏感な鼠蹊部に当ててしまっていた。

（うほっ、凄い……。こいつ、こんなに体を震わせて、恥ずかしいんだろうに……。やっぱり、それがいいのか？）

両脚を広げた分だけ開けた肉裂。美しいピンクの花弁は発達したクリトリスに反して薄く、どこまでが雨水なのか疑わしいほど濡れていた。

「だめ……疼いちゃう……。このままじゃ、終われない。はあ、はあ、しないと、また眠れなくなっちゃう」

後頭部に乗せていた両手が下りてくる。露出に感じていた少女は、それで自分の二つの

乳首を摘みだした。ピクンっ、と腰が一度跳ねた。

「の、乃愛……」

「う……っ、はあん……っ。こ、こうしないと、もう、止められないの……。軽蔑していいよ。私、アンタに嫌われて、当然の女の子なんだもん。あ……はあっあ——っ」

普段は蹴飛ばしている男の前で、少女は全裸で、乳首を弄ってオナニーをしている。しかも屋外だ。深夜で、まず誰かがやってくる可能性のない場所とはいえ、生暖かい夏の湿った外気が全身を包んでいる。

（くっ……、卑怯だぞ、乃愛……。こんなはしたない格好で、エロすぎだ。くう……っ）

顔立ちは可憐で、あどけなささえ残したような美少女。そんな彼女がいけない性癖を告白しながら、盛りついた様子を見せつけてきた。

洸也は自分の股間を押さえていたが、我慢ができなくなってくる。

そんな様子を、頬を赤く染めながら、目敏く少女は見ていた。大きな瞳が切なそうに細められる。

「アンタも、する……？ 見せて……、はあ、はあ……、私のエッチな姿で、興奮してくれているの、見たい……」

言葉の意味は理解できた。一瞬、躊躇った。だが、このまま我慢し続けたら、衝動の矛先はきつとそのまま後輩少女の肉体に向かってしまう。

「むふっ、はあ……。くそ……っ、お前が見せつけるからだぞ」

普段の何倍も速い速度で、ズボンと下着の中から硬直しきった肉棒を取り出した。

脈打つほどに興奮しきった強張りが解放されて外気にあてられ心地よい。

「あはあつ、こ……の、オチンポっ……、そ、そんなに、おつきつかつたんだ……。ああ、私……裸とオナニー見られて、オチンポっ、大きくされちゃってるうっ！」

愉悦に浸るように乃愛の唇が微かに開かれる。口内には唾液が煙り、瞳に潤みが生じていた。

「ふうっ、はあ、乃愛……俺っ……」

ぎゅつと血管の浮き上がった肉茎を握り締める。最初は鎮めるように緩やかに扱きを始めた。先漏れたカウパーが伝い落ちて指先を濡らしてくる。

「ふアあつ、男の子の、オ、オナニーっ、やらしい……。見ててあげるから、私のも見てっ。い、一緒に、気持ちよくなりたいたい」

コリコリしていそうな乳首をきつく摘み、力加減に応じて喘ぎを漏らす乃愛。卑猥なダンスを踊るように腰が振られ、ねっとりとした蜜がワレメの中心から漏れてきた。

座って金髪美少女の股間を覗き込んでいる少年には、一層スケベになっていく女陰の様子が丸見えである。真珠色の肉芽の膨らみが増したようで、土手肉の内側にある粘膜の色に赤が濃くなっていた。

「か、感じちゃう……。ハアハアっ、私っ、見られてもつと変態になっちゃううっ！」
肉ピラの合間に溜まった淫蜜が糸を引いて垂れてくる。くねる腰に合わせて揺れて、落



ちてくるそれを洗也は掬って自分の肉棒に塗りたてた。

カウパーと混ざり合って、くちゆくちゅつ、と手淫が音を立てる。

「ああ、乃愛……お、お前って、本当に……変態なんだな……」

嗜虐的な気分が少し湧いて、煽るように言うと、ピクンと少女の肢体が痙攣した。乳首を觸っていた手の一方が降りてくる。

「い、イキたいよ……、見られながら、イキたい……」

細く小さな指が、盛りついたクリトリスを捉えた。再びピクンと腰が跳ねる。

それは遠慮なしにギュッと摘まれた。乃愛の唇が自然に大きく開いて、涎が漏れてくる。まるで堪えていた欲求をぶつけるように、膨らみきった肉芽が破裂するかと思われるほどに、きつく。

「ひゃふう……っ！ 変態オナニーいつ、いつもより……きちゃう……」

今度は、激しく三本の指で擦りつけ、乃愛の腰はセックスを連想させるように上下に揺らされる。

（す、凄い……エッチなお汁が、こんなに、溢れて……）

立ったまま、はしたなく股間を広げ、お尻を揺らして、膨れあがる性欲と衝動のままの苛烈な指の擦り付けだった。どんどん漏れていく淫蜜が、幾筋も液糸を作って雑草の上に落ちていく。

「はっ、はっ、はっ……、ああ、いつもこんなオナニーしてたの……。クリちゃんつ、こ、

こんなに弄り回してえ——っ！　だから、もつと見てっ、蔑んで、いいからア！」
ぬちゅっ、ぐちゅぐちゅ……っ！　牝汁が彼女の指先に絡みつき、のたうつようになつた裸体から雨露が飛び散った。

「の、乃愛……、はあ、はあ、蔑む、なんて……」

屋外で行われるいやらしい行為で、愛らしい声で鳴く乃愛。快楽に弄ばれる眉根を寄せた表情も、むしろ可愛く、愛しくも思えた。そんな彼女の顔を見つめながら、洗也は堪らず自分の手の動きを早くする。

「いっ、いい……っ！　洗ちゃんがっ、私のド変態な、露出オナニー見てるうううっ！」
くちやくちやくちや——っ！　少女の愛らしい手が捉えられないほどの速さで、股間に擦りつけられた。

（い、今、俺のこと、洗ちゃんって……!?　ああ、でも……今は……）

下級生の指の合間から飛び散った牝汁を再び掬い、膨張しきったカリ首を滑らす。
性悦に増す息苦しさの中、肉棒が快感に痺れてきた。

「あはアんっ、洗ちゃん、洗ちゃん……っ、私がやらしくイクとこ、見て、見て、見てええええ！」

指先が乳房に減り込むほどに鷲掴みしていたもう一方の手が、淫乱に震わされるお尻の方へと流れた。

柔らかく実った二つの尻房の谷間を割って、指先が潜り込んでいく。

灼液を大量に噴出しながら、苛烈に跳ねる肉棒の先端が子宮口に幾度も擦りつけられる。「きくう——っ！ 洗ちゃんザーメン……っ、あふいのっ、イ……イイっん！」

舌を突き出すようにアへり、彩の首筋に頭部を倒し、乃愛の汗に塗れた肢体が、ビクうっ、と痙攣した。

濃厚な白濁と溢れかえった牝汁が混ざり合いながら、プシュっ、と結合部から飛沫をあげる。

震える熱籠った女体から力が抜けて、刺激の抜けぬ彼女の全身は震え続けた。

「はあ、はあ……、可愛いよ、乃愛……」

下級生美少女の中の余韻を愉しみながら、赤らんだ頬をそつと撫でた。

その時、

「あはあああん！ 私も……、私も洗也君が欲しいっ！」

悲痛に泣き叫ぶような声が聞こえた。

*

美琴の股間に食い込んでいた荒縄はぐっしよりと彼女の淫蜜で濡れている。純白のショーツは染みのない部分の方が圧倒的に少なく、幼馴染みは顔を真っ赤に恥ずかしそうに横を向いた。

「自分の許嫁が他の女の子とエッチしているところを見て、こんなにぐちよぐちよにするなんて……、美琴くんは本当に寝取られ好きの変態なんだ。そのうえ……」

ぐいっと縄を上を引いてやると、彼女の唇が自然に開いて、甘い吐息を漏らしていく。

「ん、はあ……、痛気持ちい、いいですう」

「むむつ、このド変態マゾ眼鏡め」

真面目な眼鏡委員長キャラが巨乳でドM。これはとても重要だ。

悪い男に徹しようとはしていても、興奮と驚きは隠せない。乃愛と彩も同じであったように、微かに震えた手で股間のロープを外す。胸元の荒縄はそのままにさせた。

興奮状態の息遣いのまま僅かに俯きながら立つ美琴の前で姿勢を下ろす。

スカートが脱がせ、ショーツも下ろす為に彼女の腰に手を当てると、感慨深さと興奮が同時に起こった。

（美琴……、小さい頃から知っている女の子。こんなに、やらしく成長して……。と、とにかく、マゾな彼女が満足するように……）

大量の淫蜜を含んで重くなった下着をズリ下ろしていく。

「こ、洗也君に、とうとう晒しちゃう……」

牝汁に塗れた恥毛が現れ、更に下に引いていくと、ショーツと鼠蹊部の合間に幾筋も粘質な糸が引かれる。かなり蒸らされた股間から煮詰めた乳製品のような女陰臭が香って、猥褻さを際立たせていた。

「うわあ、美琴のオマ○コ、どろどろに溶けてるじゃないか」

切なげな瞳が眼鏡越しにこちらを見つめている。

「いやあ……つ、こ、洗也君が、悪いんですから……」

「ドスケベな覗き見マゾが人のせいにして……、ほら、よく見せて」

下着を足から抜き取り、蟹股状態に両脚を広げさせる。

荒立ちだした息遣いで少年は覗き込んだ。

「そ、そんなに……見ないで……ください」

太股の内側全体までが濡れて光沢し、繩に擦られた肉ピラが真っ赤になって外貝から食み出している。ぬちゃぬちゃと淫蜜を滴らせ続けていて、床に向けてねつとりと落ちていった。卑猥に縮れた毛が幾つも張り付いて、包皮を捲りあげた肉芽も腫れあがったように膨らんでいる。

（おおつ、これが美琴のオ、オマ○コ……）

彩や乃愛ともまた違ういやらしさに溢れていた。発達さは彩に似て、肉芽の大きさは乃愛に近い。

「優等生の美琴先輩も、ここはとつても悪い子みたい。洗ちゃんお仕置きしてあげて」

幼馴染みの両脇に乃愛と彩が位置して、縛られた彼女に膝をつかせる。拘束のいやらしい姿のまま三人に囲まれ、嬲るような視線を浴びせられると、美琴は恍惚の表情を見せた。

「はああっ……、恥ずかしいのが、こ、こんなに……」

傍に寄った乃愛が耳元に息を吹きかけるように囁きかけた。ゾクツと豊満な女体が震えを起す。

「ふふ、そうでしょ、美琴先輩……。恥ずかしいは気持ちいいんです」

蟹股になって広げられた脚間から、またねつとりと淫蜜が滴り落ちていった。

「さあ、洗也……。その私たちのエッチな愛液に塗れたチンポで、美琴くんを叩いてやってくれ」

「お、おう……」

返事をしたものの、多大な緊張を覚える。

(美琴が……。望んでいることだ……)

ぬちゃぬちゃと湿りきった肉棒を握り、立ち上がって潤んだ瞳をした美琴を見下ろした。大きな西瓜のような肉果実が汗に輝き、濃厚に肌の麝香じやこうが香ってくる。感じて開いた唇から唾液に濡れた舌を僅かに出した牝犬の顔。一度大量に精を放った肉棒も完全に強張りとして復活した。

パチンつ、と柔らかな脂肪をたつぷりに詰め込んだ巨乳を男根で叩く。

「あはんっ……。熱い……」

一瞬だけ眉を顰め、それから瞳を嬉しそうに細める幼馴染み。

肉棒に纏わりついていた他の女子の淫蜜が美琴の温かな乳肌ちみに、ねちよねちよと付着する。弾力が、たふんと男根を叩き返してきた。

（うわあ、これ……気持ちいいかも……）

亀頭の先端を円錐状に突起した乳首に擦りつけ、コリコリとした感触が鈴口を擦ってき
た。尿道を快感が通過して、奥弁に甘く痺れてしまふ。

「ほ、ほら、もう一度……、やらしすぎるオッパイをした罪だ」

ぺちぺちと連続して叩きつけ、沈み込むほど柔らかな乳肉の弾力を肉棒で直接感じてい
く。真面目な眼鏡の委員長の顔が、恥辱の悦楽に感じてしまつて、飲み込まれていく様子
がよく分かつた。

「ひゃあ……つ、洗也君の、オチンチンに……私のみつともないオッパイがあつ……」

はあ、はあ、と逆上せ上がっていく美琴の息遣い。頬は桜色に染まつて、夢見る少女の
ように呆けた表情になつた。

「ンっはあ……、も、もつとお仕置きい……」

唾液塗れの舌を犬のように出して、とろんと臉を下ろす幼馴染み。その背後に悪戯な笑
みを浮かべた乃愛と彩が張り付く。

「自分だけいい気分になつていたらダメですよ、先輩……」

「そうだ、大事な人は気持ちよくさせないと……」

二人の少女は自分たちの淫蜜のつけられた美琴の荒縄で裾野を絞り込まれた肉果実を持
ち上げるように掴んだ。ずっしりと重量感溢れ、柔らかく彼女らの指先が乳肉に沈み隠れ
る。



「う……う、こ、こんな重さ……、私、感じたことない……。こ、こんなもの……。こうしてやるう」

「の、乃愛ちゃん、ダメ……。ひゅううっ、激し……」

柔肌が波立つほどに美琴の巨乳を揉みしだきながら、徐々に乃愛の表情に惨めさが浮かんできた。

「うわあ、こ、こんなオッパイ……。い、いっぱいミルクでそう……。でちゅ」

豊満な乳房に触発された彩は、瞬時に赤ちゃんモードに入って、先端を自分の顔に寄せてくる。ぷちゅ……。つ、尖らせた唇が本当に母乳を噴出しそうに突起した乳首を捉え、きつく吸い上げていった。

「ああ……。んっ、そんな、先輩……。で、ません……。くちゅくちゅしたって……。あふうううっ」

生徒会長の唾液が唇の端から漏れて、クラス委員長長の汗ばんだ乳肌を伝い落ちていく。もう一方では、半分やけになった乃愛がコンプレックスを叩きつけるように肉の果実を捏ね回した。

「オッパイ大きいと、こ、こんな感じなの。うえええん、どうせ知らなかったですよ」

思わぬ百合展開に洗也の肉棒の先端からは、カウパーが大量に滲み出てしまう。酷く疼いてこちらにも刺激を欲してきた。

「くふんっ、はあ、はあ……。激しいの……。好きい。もつときつく握ってえ……。も、も

つと……、乳首しゃぶつてえ、噛んでえ、食べて食べてええええ！」

美琴の被虐的な求めに応じて、彩が乳首の周辺を甘噛みすると、

「ひやうっ！ こ、これ……いいですううう」

ピクっ、と眼鏡の委員長の身が跳ねる。

だんだんと我慢できなくなってきた少年は、腰を寄せて、大きな強張り全体を肉の双球の谷間に当ててしまった。

それを合図として、乃愛は乳房を觸る手の動きを止め、彩も唾液に濡れた唇を離す。

「ああ、洸也君……」

「美琴……俺のを……」

母性の機能を越えて破廉恥に成長してしまった果肉の前に、逞しくそそり勃つたものが突き出されれば、誰もが同じことを考えた。

「一度、やってみたかったんだ。自分のじゃないのが癪だけど」

確かに乃愛では無理だと思ったが賢明にも口にはしない。

「私は、考えたこともなかったな。でも……気持ちよさそうでちゅ」

攻める側と赤ちゃんモードをいつたりきたりしている彩は、おそらく自分が挟まれる方として言っているのだろう。母性の象徴に甘えたくて仕方がないといった瞳をしていた。

先輩と後輩の手で左右の巨乳を中央に寄せられ、熱く滾った男根が豊富な柔肉に包まれる。

（おお、こ、これが噂に聞く、パ、パイズリつてやつか……。あつたかくて、汗がぬちゃぬちゃして……。いいっ！）

硬直しきった逸物が蕩けさせられるような快感が染み込んできた。質量たつぷりの乳肉に幹部が完全に隠れて、パンパンに真っ赤に膨れた亀頭が生真面目そうな眼鏡委員長の鼻先に向く。

「んは……。っ、洗也君のオチンチンの臭い……。お股が、し、痺れてきちゃいます。乳首、洗也君の腰に当たって……。感じるう」

他の女の子の蜜と少年の汗が混じった肉棒から発する卑猥な芳香に、美琴の半開きの口内に唾液が溢れていた。

肉棒の先端からは、カウパーが漏れて、艶やかな柔肌を汚していく。

「我慢してください。洗ちゃん私の中でいったばかりだから、先に十分に刺激しないと」

「そう、美琴くんが挟んでいるのは、私が最初におしゃぶりしたものだ」

寝取られ好きを煽る乃愛と彩の手が上下に揺らされ始めた。ゆさゆさと振れる心地よい乳肉が、熱い肉棒をズリ擦ってくる。

「ほあ……。気持ち、いい……」

木目細かな肌と柔らかな肉に男の局部を包まれながらの刺激で、鈴口からだらだらと淫水が流れていった。それが谷間に染み入って、ぬちゃぬちゃと淫靡な音を立て始める。

「はあんっ……。私胸の内側が、洗也君の、オ、オチンチンの形に歪んでます。はあ、

はあ、別の女の子を責めた酷いオチンチン……、こ、こうして……やります。んぷつ……」
涎を垂らしそうに唾液の煙った口内を見せ、亀頭を飲み込む美琴。

「うは……！！ これも、いい……」

濡れた唇がカリ首の真下に吸着して、そこからダラつと唾が漏れていく。じゆるつ、くちゅくちゅ……。別の温かさが感じやすい牡の粘膜に広がって、いやらしく蠢く舌が舐め回してきた。

「んふんんつ……、洗也ふんの、おひんひんの味……、ぢゅぶ、んつぶ、ぺちよぺちよ……、おいひい……」

乳房を激しく揺さぶられる刺激と許嫁の男子の腰にコリコリした乳首の先端が擦られる快感で、うつとりとした愉悦の表情を美琴は見せる。汗とカウパーと唾液が大きな肉果実の合間で混ざり合い、甘酸っぱい猥褻な匂いが乳肌に染みつけられた。

人の秘め事を覗き見ながら、ずっとこの瞬間を夢見ていたのか、巧みに舌が亀頭に絡みついてくる。

「ぺちゅ、んぷつ……、口マ○コつ……いい？ いいの、洗也ふん……？」

悩ましく顔を振り動かし、ずれた眼鏡越しに上目遣いで幼馴染みは見つめてきた。

ゾクゾクと感じていく。幼かった頃にはいつも一緒に遊んで、年頃になっては口煩く世話を焼いてくれた少女が、自分の牡の象徴たる逸物を口に含んで愛撫しているのだ。

「ああ、いいよ、美琴……。本当に、あそこみたいだ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!